

[Original Paper]

Practical experience of education for health by nursing students

Takumi Ogata*

* Aino Gakuin College

Abstract

Due to the short of time “Practical experiences of education for health,” a part of the subject “Basic nursing techniques” for the second year students is not possible to complete in the limit of the semester. This course was carried out during the summer vacation for the students of 1999 and 2000. The objects of their practical experiences were their parents, brothers, sisters and friends. The data were subjected to analysis and it was found that the majority of the students considered its merit. Thus, we conclude that the course during summer vacation is an effective education for the nursing students.

However the students of 2000 showed more active attitude than those of 1999, probably because the former was given information on the experiences of the students of 1999 in advance to their practice.

Key words : teaching skill, experiences education, nursing students

(原 著)

看護学生による教育・指導技術の体験学習効果

緒 方 巧*

【要 旨】 基礎看護学Ⅲの授業において時間的に実施できなかった教育・指導技術の体験学習を、1999年度および2000年度の学生に対し夏期期間中に学生の家庭あるいは周辺の、健康に問題をかかえた、たとえば両親、きょうだい、友人を対象として実施させた。その結果、全般的にこの体験学習を肯定的に受け止めた学生が多く学習効果として意義があった。

しかし、この体験学習のいくつかの内容に対する反応については1999年度生と2000年度生の間には差が認められた。それは、1999年度の学生の学習成果を前もって説明を受けた2000年度の学生は、体験学習に対する準備ができた結果であると考えられる。

キーワード：教育・指導技術、看護学生、体験学習

はじめに

わが国の看護教育では、1990年のカリキュラム改正において、「教育・指導技術」科目が新設された。この改正の背景には国民の高齢化や長期慢性疾患患者の増加、医療の高度化に伴う国民の健康に対する関心の高まりなどがあげられる。このような社会的変化に応じるため、看護者には医師の診療の補助や患者の日常生活の援助技術だけではなく、人々のセルフケア能力を高めるための教育的役割が求められるようになった。この目的から、「教育・指導技術」科目は、21世紀を生きる人々の健康を援助する看護学生にとって必須であるだけでなく、青年期にある学生が自身の健康管理のあり方を学ぶ上からも重要な科目である。

本学の基礎看護学では、教育・指導技術(10時間)を基礎看護技術Ⅲ(30時間)の中で、看護過程(20時間)の履修後に教授している。しかし履修時間が少ないため、その時間内に教育・指導技術の演習を実施することは困難である。机上で学ぶ事例学習だけでは対人関

係を含む看護技術として学習成果をあげることに限界がある。そこで、1999年度の学生に夏期休暇を利用して健康教育・指導の体験学習を課題として与えた。その結果、体験学習に一定の効果が見られたので、2000年度にこの学習成果を生かした授業の工夫を行った。その結果、この体験学習が学生の教育・指導技術の理解に有効であることがわかったのでここに報告する。

方 法

1. 基礎看護学Ⅲ(教育・指導技術)の授業内容と体験学習方法

基礎看護学Ⅲは1単位(30時間)でその科目の目標は以下のとおりである。“看護の対象を総合的に理解し、看護の対象がもつ健康問題を系統的にかつ専門的知識に基づいて判断し、解決するための方法を学ぶ。事例を通して問題解決能力、応用能力を身につける。また、看護の対象となる患者や家族の健康を維持・増進させるための教育・指導の技術について学ぶ”。

* 藍野学院短期大学

授業回数は15回で、授業時間の配分は20時間（10回）を看護過程、10時間（5回）を教育・指導技術にあてている。

教育・指導技術は次の5項目を学習目標としている。

- 1) 看護における教育・指導の役割と指導方法の理解。
- 2) 教育・指導を構成する項目と指導対象から得た情報の分析方法の理解。
- 3) 教育・指導計画の意義と方法、教育・指導の効果あげる条件の理解。
- 4) 教育・指導計画の立案と実施。
- 5) 教育・指導の評価の目的と方法の理解。

2年次の前期6月から7月までに1)～3)を終了。

4)を夏期休暇中の課題とし5)を夏期休暇後におこなった。

体験学習課題のねらいは以下の3点である。

- 1) 教育・指導の実際をととして指導対象の健康行動への行動変容に必要な、教育・指導の方法を理解する。
- 2) 教育・指導対象との信頼関係づくりのために必要な要素を学習する。
- 3) 自分の健康管理に関心を高める。

体験学習の方法及び発表会については以下の順で説明を行った。

- 1) 健康の維持・増進に何らかの問題を持っている人を身近な人の中から見つける。
- 2) 夏期休暇期間を利用して、健康問題の解決のために教育・指導を行うことについて指導対象から理解と承諾を得る。

表1 教育・指導体験学習に関する調査内容

<p>I. 教育・指導対象に関する項目</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 教育・指導対象の年齢 () 歳 2. 対象はいつ頃決定しましたか。 1) 休暇前 2) 休暇に入ってからすぐ 3) 8月上旬 4) 8月中旬 5) 8月下旬 3. 教育・指導を開始した時期はいつごろでしたか。 1) 休暇に入ってからすぐ 2) 7月下旬 3) 8月上旬 4) 8月中旬 5) 8月下旬 4. 対象への動機づけはどうでしたか。 1) できていた 2) あまり苦労せずできた 3) なかなかできなかった 4) ほとんどできなかった 5. 指導に対して対象から得た反応はどうでしたか。 1) とてもよかった 2) よかった 3) あまりよくなかった 4) よくなかった <p>II. 体験学習の内容に関する項目</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 取り組むにあたって課題についての理解はできていましたか。 1) よくできていた 2) できていた 3) あまりできていなかった 4) できていなかった 2. 授業で得た知識の活用はできましたか。 1) とても活かした 2) 活かした 3) あまり活かさなかった 4) ほとんど活かさなかった 3. 課題に対して意欲を持つことができましたか。 1) よく持てた 2) 持てた 3) あまり持てなかった 4) ほとんど持てなかった 4. 指導過程で苦労した点はどこでしたか。 1) 情報収集 2) 情報の分析 3) 指導目的の設定 4) 指導目標の設定 5) 指導内容の決定 6) 指導方法の決定 7) 指導用具の作成 8) 指導の実際 5. 実際に教育・指導してみてもどんな受け止め方を体験しましたか。 1) 面白い 2) 学習が深まった 3) 意欲が持てた 4) やりがいがある 5) 看護の喜び 6) あまりしたくない 7) 大変だ 8) 嫌だ 9) 興味が持てない 10) 難しい 11) その他 <p>III. 体験学習方法に関する項目</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 夏期休暇期間に教育・指導過程を学習する意義についてどう思いましたか。 1) とてもよい 2) よい 3) あまりよくない 4) よくない 2. 自分で指導対象を選択することについてどう思いますか。 1) 自分で自由に見つけたい 2) 事例を指示設定してほしい 3) その他 3. 教育・指導技術の体験学習課題の内容として指導計画を立てるまでと実際に指導するまでについてどう思いますか。 1) 計画を立てるまでよい 2) 実際に指導するまでが良い 4. 今後の教育・指導への取り組みとして積極的に教育・指導に取り組みますか。 1) 積極的にする 2) 必要に迫られたらする 3) できることならしたくない <p>IV. 発表会の代表者選出方法と体験学習から得た学習内容（自由記述）</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 代表者の選出方法はどうでしたか。 1) 今回の方法でよい 2) 変えた方がよい 2. 体験学習から得た学習内容（自由記述）

- 3) 教育・指導対象に関する情報収集と分析の視点は、授業で学習した(1)指導対象の健康学習への準備状態について7項目、(2)指導対象の学習意欲について3項目、(3)教育・指導対象の学習意欲についての5項目とする。
- 4) 教育・指導計画書に、指導対象の情報分析の結果と、今回の教育・指導目的・目標、指導内容、指導方法、指導に用いた資料や物品について具体的な計画を立案し記入する。
- 5) 指導が終了した時点で、指導対象からの反応などを含めた教育・指導の実施結果と体験学習で得た学習内容を記入する。
- 6) 夏期休暇終了後、教育・指導計画書と指導用具(自分で独自に作成した資料や物品)を提出する。
- 7) 夏期休暇後に学習目標の5)を学習し、6人の小グループに分かれて全員が課題の成果を発表する。各グループの発表者の中で最も体験学習の成果が得られたと評価された代表を1人選出する。さらに各グループから選出された学生の中から、教員が6人～8人を選抜き、クラスの発表会で発表させ、それを全員で聞いて学習する。

2. 調査対象

夏期休暇に教育・指導技術の体験学習を行った1999年度の2年生89名と2000年度の2年生86名、合計175名とした。

3. 調査期間と方法

いずれの学年も学年の前期が終了する9月中旬、基礎看護技術Ⅲの最終講義時に行った。筆者が独自に作成した質問紙による集合調査とし無記名とした。調査の目的を説明して配布し、記入後その場で回収した。

4. 調査内容(表1)

- 1) 教育・指導を行った対象に関する項目、5項目
- 2) 体験学習の内容に関する項目、5項目
- 3) 体験学習の方法に関する項目、4項目
- 4) 発表会の代表者選出方法1項目と体験学習から学生が得た学習内容(自由記述)

5. 分析方法

調査の結果は χ^2 検定により有意差を検定した。また、自由記述による学習内容はその内容を体験学習のねらいに沿って類別し学習効果を分析した。

結 果

調査の回収率は1999年度生が81名(91.0%)、2000年度生が82名(95.3%)の合計163名(93.1%)であった。記述集計結果は表2～表5に示し、このうち有意差の見られた項目は表6に示した。

1. 調査内容1)の教育・指導を行った対象について、(1)教育・指導を行った対象の年齢、(2)教育・指導対象を決定した時期、(3)教育・指導の開始時期、(4)指導内容に対する指導対象への意欲の持たせ方、(5)指導対象から得た反応について(表2)みると以下のとおりであった。

- (1) 学生が教育・指導の対象に選んだ人の年齢は、両学年ともに10代から90代までで80代はいなかった。多かったのは40代で、次いで50代、20代、10代であった。
- (2) 教育・指導対象を決定した時期は、両学年ともに夏期休暇前、7月下旬、8月上旬の順に多かった。

表2 教育・指導対象に関する項目

() = %

指導対象の年齢	10歳以下	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代	90代
1999年度 (n=81)	2 (2.5)	10 (12.3)	14 (17.3)	1 (1.2)	29 (35.8)	15 (18.5)	4 (4.9)	5 (6.2)	0 (0)	1 (1.2)
2000年度 (n=82)	5 (6.1)	17 (20.7)	15 (18.3)	0 (0)	20 (24.4)	16 (19.5)	2 (2.4)	5 (6.1)	0 (0)	2 (2.4)
指導対象の決定時期	休暇前		7月下旬	8月上旬			8月中旬	8月下旬		
1999年度 (n=81)	33 (40.7)		20 (24.7)	16 (19.8)			9 (11.1)	3 (3.7)		
2000年度 (n=82)	33 (40.2)		24 (29.3)	17 (20.7)			6 (7.3)	2 (2.4)		
指導開始時期	休暇前		7月下旬	8月上旬			8月中旬	8月下旬		
1999年度 (n=81)	1 (1.2)		24 (29.6)	29 (35.8)			21 (25.9)	6 (7.4)		
2000年度 (n=82)	3 (3.7)		18 (22.0)	34 (41.5)			24 (29.3)	3 (3.7)		
指導対象への意欲の持たせ方	できていた		あまり苦労せずにできた			なかなかできなかった		ほとんどできなかった		
1999年度 (n=81)	15 (18.5)		37 (45.7)			26 (32.1)		3 (3.7)		
2000年度 (n=82)	21 (25.6)		49 (59.8)			12 (14.6)		0 (0)		
指導対象から得た反応	とてもよかった		よかった		あまりよくなかった			よくなかった		
1999年度 (n=81)	7 (8.6)		56 (69.1)		18 (22.2)			0 (0)		
2000年度 (n=82)	15 (18.3)		49 (59.8)		18 (22.2)			0 (0)		

緒方：看護学生による教育・指導技術の体験学習効果

表3 体験学習の内容に関する項目

() = %

1	課題の理解	よくできた	できた	あまりできなかった	ほとんどできなかった			
	1999年度 (n=81) 2000年度 (n=82)	1 (1.2) 11 (13.4)	46 (56.8) 51 (62.2)	32 (38.5) 19 (23.2)	2 (2.5) 1 (1.2)			
2	知識の活用	とても活用できた	活用できた	あまりできなかった	ほとんどできなかった			
	1999年度 (n=81) 2000年度 (n=82)	4 (4.9) 5 (6.1)	50 (61.7) 47 (57.3)	25 (30.9) 30 (36.6)	2 (2.5) 0 (0)			
3	課題への意欲	よくもてた	もてた	あまりもてなかった	ほとんどもてなかった			
	1999年度 (n=81) 2000年度 (n=82)	4 (4.9) 13 (15.9)	47 (58.0) 59 (72.0)	29 (35.8) 10 (12.2)	1 (1.2) 0 (0)			
4	指導過程で苦労した項目 (複数)	情報収集	情報の分析	目的目標設定	指導内容	指導方法	指導用具	指導実施
	1999年度 (n=81) 2000年度 (n=82)	6 (7.4) 9 (11.1)	31 (38.3) 29 (24.4)	14 (17.2) 4 (4.9)	16 (19.8) 5 (6.1)	25 (30.9) 18 (22.0)	9 (11.1) 16 (19.5)	13 (16.0) 17 (20.7)
5	体験学習肯定的受け止め (複数)	面白い	学習の深まり	意欲が持てた	やりがいがある	看護の喜び		
	1999年度 (n=81) 2000年度 (n=82)	12 (14.8) 16 (19.5)	22 (27.2) 36 (43.9)	14 (17.3) 21 (25.6)	14 (17.3) 26 (31.7)	5 (6.2) 12 (14.6)		
6	体験学習否定的受け止め (複数)	あまりしたくない	大変だ	いやだ	興味が持てない	難しい	その他	
	1999年度 (n=81) 2000年度 (n=82)	3 (3.7) 1 (1.2)	36 (44.4) 27 (32.9)	1 (1.2) 0 (0)	0 (0) 1 (1.2)	25 (30.9) 15 (18.3)	0 (0) 0 (0)	

表4 体験学習の方法に関する項目

() = %

1	体験学習の意義	とてもよい	よい	あまりよくない	よくない
	1999年度 (n=81) 2000年度 (n=82)	12 (14.8) 18 (22.0)	42 (51.9) 60 (73.2)	12 (14.8) 0 (0)	4 (4.9) 4 (4.9)
2	指導対象の選択	自分で自由にみつきたい	事例を指示設定してほしい	その他	
	1999年度 (n=81) 2000年度 (n=82)	47 (58.0) 72 (87.9)	32 (39.5) 8 (9.8)	2 (2.5) 2 (2.4)	
3	体験学習課題の内容	計画を立てるまでよい	実際に指導するまでがよい	その他	
	1999年度 (n=81) 2000年度 (n=82)	5 (6.2) 5 (6.1)	75 (92.6) 77 (93.9)	1 (1.2) 0 (0)	
4	今後の取り組み	積極的にする。	必要に迫られたらする	できることならしたくない	
	1999年度 (n=81) 2000年度 (n=82)	38 (46.9) 39 (47.6)	40 (49.4) 42 (51.2)	3 (3.7) 1 (1.0)	

表5 発表会の代表者選出方法に関する項目 (I)
体験学習から学生が得た学習内容 (II)

() = %

I	発表者の選出	今回の方法でよい	変えた方がよい
	1999年度 (n=81) 2000年度 (n=82)	80 (98.8) 78 (95.1)	1 (1.2) 4 (4.9)
II	(1) 指導過程において適切な対象の情報分析をするためには、確実な知識の習得と情報収集が重要である。		
	(2) 行動変容につながる教育・指導技術には教育・指導する対象への動機づけと個別性にあった指導用具 (資料や物品) の工夫が必要である。		
	(3) 教育・指導対象とのよい人間関係を築き信頼関係をつくり上げることが、指導を受ける対象の意欲を引き出し効果的な指導を行うことにつながる。		

(3) 教育・指導の開始時期は両学年ともに8月上旬が多く、次いで1999年度生は7月下旬、8月中旬の順で、2000年度生は8月中旬、7月下旬の順であった。

(4) 指導内容に対する指導対象への意欲のもたせ方で、両学年とも最も多かったのは、あまり苦労せずにできたで、次いで1999年度生はなかなかできなかった、できていた、の順で、2000年度生はできていた、なかなかできなかったの順であった。 χ^2 検定では、有意水準5%で2000年度

生の選んだ指導対象の方が有意に1999年度生の学生が選んだ対象の意欲より高かった。(表6)。

(5) 指導対象からの反応は、両学年ともに、よかった、あまりよくなかった、とてもよかったの順であった。

2. 調査内容2) の体験学習の内容について、(1) 課題の理解、(2) 知識の活用、(3) 課題への意欲、(4) 指導過程 (情報の収集、情報の分析、教育・指導目的、目標の設定、指導内容、指導方法、指導用具、

表6 1999年度生と2000年度生において有意差のあった項目

質問項目	回答	年 度		χ ² 検定 結 果
		1999年度 n = 81	2000年度 n = 82	
指導対象への意欲の持たせ方	できていた・あまり苦労せず	52 (64.2)	70 (85.4)	**
	なかなか・ほとんど	29 (35.8)	12 (14.6)	
課題の理解	よく・できた	47 (58.0)	62 (75.6)	**
	あまり・ほとんど	34 (41.0)	20 (24.4)	
課題への意欲	よく・持てた	51 (62.9)	72 (87.9)	*
	あまり・ほとんど	30 (37.0)	10 (12.2)	
体験学習の意義	とても・よい	65 (65.4)	78 (95.2)	*
	あまり・よくない	16 (19.7)	4 (4.9)	
対象の選択	自分で自由に	47 (58.0)	72 (87.9)	*
	事例の指示設定	32 (39.5)	8 (9.8)	

χ²検定 * p<0.01 ** p<0.05 () = %

指導の実施)で苦労した項目、(5) 体験学習の受け止め方(肯定的・否定的)(表3)をみると以下のとおりであった。

- (1) 課題の理解で、よくできた・できた群は1999年度生がそれぞれ1名と46名の合計47名、58.0%、2000年度生は11名と51名の合計62名、75.6%であった。
- (2) 知識の活用で、よく活かした・活かした群は1999年度生が4名と50名の合計54名、66.6%、2000年度生は5名と47名の合計52名、63.4%であった。
- (3) 課題への意欲で、よく持てた・持てた群は1999年度生が4名と47名の合計51名、62.9%、2000年度は13名と59名の合計72名、87.9%であった。これらのχ²検定では、課題の理解で有意水準5%、課題への意欲で有意水準1%で2000年度生と1999年度生との間に有意差がみられた(表6)。
- (4) 指導過程(情報の収集、情報の分析、教育・指導の目的・目標の設定、指導の内容、指導の方法、指導用具の作成、指導の実施)で苦労した項目を複数回答で求めた結果、両学年ともに情報の分析と指導の方法が多く、情報の分析では、1999年度生は31名、38.3%、2000年度生は29名、24.4%であった。指導の方法では、1999年度生は25名、30.9%、2000年度生は18名、22.0%、3番目からは学年差があり、1999年度生は指導の内容、教育・指導の目的・目標の順に多く、2000年度生では指導用具の作成、指導の実施の順に多かった。
- (5) 体験学習の受け止め方を、面白い・学習が深まった・意欲が持てた・やりがいがある・看護の

喜びが持てた、という肯定的回答(表3の(5))と、難しい・大変だ・あまりしたくない・いやだ・興味が持てない、という否定的回答(表3の(6))に分け比較した。肯定的回答では、両学年ともに学習が深まった、やりがいがある、意欲が持てた、面白い、の順に多く、学習が深まった、は1999年度生は22名、27.2%、2000年度生36名、43.9%、であった。やりがいがある、は1999年度生14名、17.3%、2000年度生26名、31.7%であった。一方、否定的回答では、両学年ともに大変だ、難しい、の順に多く、大変だ、は1999年度生36名、44.4%、2000年度生27名、32.9%、難しい、は、1999年度生25名、30.9%、2000年度生15名、18.3%であった。

3. 調査内容3)の体験学習の方法について、(1) 夏期休暇期間に教育・指導技術を体験学習する意義、(2) 教育・指導技術の対象の選択、(3) 教育・指導技術の体験学習課題の内容、(4) 今後の教育・指導活動への取り組み(表4)をみると以下のとおりであった。

- (1) 夏期休暇中に教育・指導技術を体験学習する意義について、とてもよい・よい群は1999年度生がそれぞれ12名と42名の合計54名、79.0%、2000年度生では18名と60名の合計78名、95.2%であった。夏期休暇期間の体験学習が、とてもよい・よいと答えた学生の理由を自由記述でみると、1999年度生は65名中27名が回答し、「時間的余裕があるので十分考え、ゆとりを持ってじっくり取り組める」、「実際に行うことで指導の方法や留意点を確認できる」、「指導をするための対象が得やすい」、「個別性を把握して内容の深

い指導ができる」、「実際に指導を行うことで机上学習との差がよくわかる」などの回答があった。2000年度生は78名中22名が回答し、その内容は「じっくり時間をかけられるので自分に余裕ができる」、「実際に行うことで総合的に理解できる」、「大変だが学ぶことが多い」、「じっくり復習して今まで以上に理解できた」、「指導をする対象と生活を共にする機会が多いので時間をかけてできる」など両学年に共通した理由がみられた。一方、あまりよくない・よくないとする学生は1999年度生4名、2000年度生10名で理由は「休暇は休みたい」、「わからなくなったときに教師と連絡がとりにくい」であった。

- (2) 教育・指導技術の対象の選択については、両学年ともに事例を指示設定されるよりは自分で自由に教育・指導する対象を見つけるほうがよいで、1999年度生47名、58.0%、2000年度生87.9%であった。
- (3) 教育・指導技術の体験学習課題の内容として、教育・指導を計画する段階までと実際に指導する段階までのどちらがよいか、については両学年ともに、実際に指導する段階までがよいとする回答が90%台であった。
- (4) 今後の教育・指導活動への取り組みについて、「必要に迫られたらする」が1999年度生40名、49.4%、99年度生42名、51.2%であった。しかし、「積極的にする」と答えた学生も45%以上の高率で、教育・指導に対して積極的姿勢を持っていることがわかった。

これらを χ^2 検定すると、夏期休暇に教育・指導技術を体験学習することの意義と対象の選択について有意水準1%で1999年度生より2000年度生に有意差がみられた(表6)。

4. 調査内容4)の、(1)発表会の代表者選出方法、(2)体験学習から学生が得た学習内容(自由記述)(表5)については以下のとおりであった。

- (1) 発表会の代表者選出の方法については、「よい」が1999年度生80名、98.8%、2000年度生が78名、95.1%であった。
- (2) 体験学習から学生が得た学習内容(自由記述)をまとめると以下の3点であった。
- ① 指導過程において適切な対象の情報分析をするためには、確実な知識の習得と情報収集が重要である。
- ② 行動変容につながる教育・指導技術には教育・指

導する対象が指導内容に対して意欲を持って取り組めるようにするための個別性に合った指導用具(資料や物品)の工夫が必要である。③教育・指導対象とのよい人間関係を築き信頼関係をつくり上げることが、指導を受ける対象の意欲を引き出し効果的な指導を行うことにつながる。

自己の健康管理に対する関心については多く述べられていないが、他者に教育・指導をするからには自分も実践しなければならないと述べている。

考 察

1999年度から2000年度の2年間、健康に関する教育・指導技術の体験学習を看護学生の夏期休暇課題として実施し結果をまとめた。学生は教育・指導技術の体験学習を肯定的に受け止めた者が多く、体験学習のねらいに沿った学習効果が明らかになった。

1. 教育・指導を行った対象について

学生が教育・指導対象に選んだ人の年齢は、40代、50代、20代、10代の順に多く、教育・指導の開始時期も早かった。また指導への動機づけについてもあまり苦勞せずにできている学生が多かった。これは指導対象が学生にとって日頃あるいは帰省時に接する機会が多い、すでに人間関係の取れた人々であること、そのため、それらの人がもつ健康問題を把握しやすく動機づけが容易であったためと考える。

2. 体験学習の内容について

課題の理解と課題への意欲は1999年度生に比べ2000年度生において有意に高くなっている。これは1999年度生の体験学習事例や学習成果を2000年度生の授業で紹介したことが、課題の理解を促し課題に対するイメージ化を容易にしたこと、さらに取り組みへの意欲を高める要因になったと考えられる。知識の活用では、学年間に差はなかった。しかし、両学年ともに3割の学生があまり知識を活用できなかったと答えている。これは、指導過程で最も苦勞した項目として、情報の分析と指導の方法が高かったこととも関連する。つまり、教育・指導対象から得た情報を分析する際に、既習の知識を活用できなければ分析が困難となり適切な指導方法を導き出すことが困難になる。また、知識の活用ができないことによって体験学習を大変だ、難しいと否定的に受け止める要因にもなりうる。今後は、この点を考慮して、学生個々の学習状況に応じ個別的

に検討していきたい。また、夏期休暇期間中に学生が体験学習に行き詰まったり指導状況に問題が生じたときに、その問い合わせに対応できるような体制も整えていく必要がある。

しかし、体験学習の受け止め方では大変だ、難しい、という回答が高い一方で、学習が深まった、やりがいがある、と肯定的な受け止め方が高かった。看護は人と人との相互作用、信頼関係の中で行われるものであり、この点について Tanner (2000) は、「学習効果があがる学習方法には、まず学生が楽しく自分の喜びとできるような人々との相互作用があることが必要である」と述べている。この Tanner の考えと今回の結果は一致していた。身近な人を教育・指導の対象として選び指導を実施する上で指導対象との関係において種々の人間的な相互作用が生じる。この相互作用のひとつに、指導対象からの反応があるが、両学年とも70%以上の学生がとてもよい・よい反応を得たことは学生の学習行動にプラスの効果をもたらしたと考えられる。一方、この体験学習は学生にとって教育・指導することの困難さを経験する課題であったかもしれない。しかし、この困難を身をもって感じ経験することによって教育・指導に関する知識を深めることがわかり、このことは看護者としての自覚と学習に対する動機を得る点で有効な学習形態であると考えられる。

3. 体験学習方法について

Tanner (2000) は、「学習者は単に知識を受け入れるだけの受け皿ではなく、自分自身で学習内容を創り出す人たちのことをいう」と述べている。学生は夏期休暇期間を利用して体験学習することに80%～90%がとてもよい・よいと答えており、両学年の90%が教育・指導を計画までではなく実施の段階までとするほうがよいと答えている。さらに教育・指導対象も教

師に指示されるのではなく自分で自由に選択したいと答えていた。夏期休暇利用による学習は正規の授業では満たされない部分を体験学習によって行うものであるため、授業形態としては検討が必要な点もあるが、学生の主体的な学習行動を引き出し創造性を高める点において効果的であった。また、夏期休暇という時間的ゆとりが学生の思考と取り組みを深め、達成感のある学習につながることを示唆された。

4. 体験学習から得た学びと発表会の方法について

今回の調査では、1999年度と2000年度の学生を対象に夏期休暇における、教育・指導技術の体験学習の効果を検討し、2000年度の学生により効果的な結果が得られた。しかし、体験学習から学習効果をそのねらいと比較すると、「自分の健康管理に関心が高まる」については明確な回答は得られなかった。この原因としては、質問紙で具体的な回答を引き出せなかったことも問題である。

今後は、カリキュラムの時間数や教育・指導技術と関連する科目の強化を図るとともに、他者への健康教育・指導の体験学習が学生の健康管理の向上につながるよう授業の工夫を重ねていきたい。

本研究にあたり調査に協力してくれた学生諸氏に感謝いたします。本論作成にあたりご指導いただきました紀要編集委員長の堺俊明学長、増田芳雄客員教授に感謝いたします。

引用文献

- Tanner, C. A.: Individualized Instruction in Nursing Education. 学習者の個別性に応じた看護教育. 日本看護学教育学会誌 10: 39-43, 2000